

横須賀市、三浦半島全域の小児医療に関する横浜市立大学小児科の考え方について

昨年度より吉田横須賀市長と会合を重ね、当科の考え方をお伝えし相談してまいりました。横須賀市を中心とする三浦半島全域（人口約 55 万人）を一つの医療圏と考え、新生児・小児医療を 1 ヶ所に集約化して、子どものための小児医療を推進し、小児医療の質の向上を図ることが望ましいと考えます。少人数の小児科医による医療は小児科医の過重労働と疲弊を押しすすめることになり、集約化が必須の条件になります。今後の少子高齢化時代の到来に鑑み、横須賀市が若い人々が好んで居住できる環境を整えることは重要であり、小児医療の充実はそのための重要な条件となると考えます。将来的には横須賀市が中心となって三浦半島全体の小児医療体制を構築すべきであるとも申しました。将来、小児拠点病院として広域の小児医療を担う「周産期小児医療センター（仮称）」を行政主導で設置することも提言しております。

現在、三浦半島医療圏が必要とする小児医療は（1）周産期医療、（2）小児救急医療、（3）入院を要する急性・慢性期医療 の 3 つの領域です。小児救急医療・急性期医療には横須賀市立うわまち病院が尽力してくださっています。一方、従来周産期医療と亜急性期・慢性期の小児医療を主に行ってきた横須賀共済病院が小児科医の引き上げにより機能を果たさなくなりました。横須賀共済病院は小児用の入院施設、パラメディカルが充実しております。三浦半島の子供たちに対する当科の責任と考え本年度より横浜市立大学小児科が横須賀共済病院に小児科医を派遣し、周産期医療、亜急性期・慢性期の小児医療を継続してやっていくことといたしました。横須賀市立うわまち病院と横須賀共済病院は地理的にも非常に近く、協力しながら集約に近い形で小児医療の 3 つの領域を担って行くことが出来るため、将来の「周産期小児医療センター（仮称）」の礎にもなると考えます。

集約化により入院が必要な子供たちとその保護者の方々にはアクセスなどの面で相応の負担が発生してしまいますが、小児医療を長期的に持続可能な体制にすること・小児医療の質を向上させていくことで最終的には子供たちのためになるという結果をご勘案いただき、ご理解をいただきますようお願いいたします。

横浜市立大学小児科は公立大学として「神奈川県の子供たちに責任を持つ」ことを使命として活動しています。小児医療はもちろんのこと、小児保健、小児福祉という 3 つの柱で県下に積極的に展開しています。今後も神奈川県で責任を持って推進していく所存です。

文責 医局長 梶原 良介
名誉教授 横田 俊平

2014 年 4 月